

就労外国人のための読み書き判定試験の開発

名古屋大学留学生センター

日本語メディアシステム開発部門

村 上 京 子

要旨

日本の工場で働く日系ブラジル人など就労外国人には、在日期間が10年以上と長くなっても日本語の読み書きがほとんどできない人も多い。しかし、従来の日本語能力を測る試験は日本語によって出題されるため、質問文が読めない人は受験することができなかった。そこで、就労外国人が母語で受けられるように多言語で、また生活に密着した内容による日本語の読み書き能力判定試験問題を作成し、工場などで実施した。その結果、問題数が少ないにもかかわらず、信頼性は十分な水準にあることが確認された。また、マニュアルが整備されているため、テストによる判定のゆれはほとんど見られなかった。判定結果は、工場内などの日本語教室でプレイスメント・テストとして活用されている。今後、外国人を雇っている企業や商工会議所、ハローワークなどとも連携し、処遇や就職の際の参考資料として活用していけるように拡充・普及を図っていきたい。

キーワード

就労外国人、読み・書き能力、判定試験、多言語版、信頼性、妥当性

目次

1. はじめに
2. 判定試験の開発方針
3. 対象者判定のための「読み・書き」判定試験の開発
4. 実施結果
5. 考察と今後の課題

1. はじめに

1990年の入国管理法改正に伴い、南米などから日系外国人が多数来日し、現在日本に暮らす外国人の数は200万人を超える。名古屋の近郊にある豊田市でも自動車関連の工場などで働いている就労外国人の数は多く、近年の不況や災害・事故などによる理由で減少傾向にあるものの住民の約3～4%が外国籍住民で、平成24年3月現在外国人の数は14,075人に上る。そのうちブラジルにルーツを持つ人が6000人以上いる。

この豊田市から名古屋大学留学生センターは委託を受け、2007年度から市に住んでいる、もしくは働きに来ている外国人の日本語能力を引き上げるプロジェクトを行っている。2007年度には市の住民を対象とした予備調査を行い、2008年度から「とよた日本語学習支援システム」を構築・運営し、現在にいたっている。

「とよた日本語学習支援システム」では、日本語がほとんどできない外国籍住民に対し、周囲の支援があれば日本語でコミュニケーションできるレベルに達するまでの日本語学習を保障することを目標に掲げ、そのために、学習成果が見えやすく、日常生活や就職等に直結することにより、学習意欲が湧くシステムを作ることを目指している。そのために、日本語によるコミュニケーション能力を判定するための基準（表1）および測定方法を開発してきた。ここでは、そのうちの対象者判定のための読み書き能力判定試験の開発と結果の分析について述べる。

とよた日本語能力判定には、0レベルから4レベルまでを測る「レベル判定試験」と、システムが運営する教室の対象者を判定する「対象者判定試験」の2種類がある。システムの運営する教室では0、1レベルの学習者を2レベル以上に引き上げることを目標にしているため、「対象者判定試験」では判定結果から0レベル、1レベルの対象者と、2レベル以上の対象外の

表1 とよた日本語判定基準

レベル	段 階	内 容
6	熟 達 段 階	より抽象的な議論が日本語を用いてできる。
5	進 化 段 階	効果的なコミュニケーションが日本語を用いてできる。
4	拡 大 段 階	より多くの領域で日本語を用いてコミュニケーションできる。
3	自 立 段 階	自立して最低限度の社会参加が日本語で行える。
2	要支援段階	周囲の支援に基づいて基礎的な社会参加が日本語で行える。
1	基 礎 段 階	限られた単語レベルを理解したり、話す・書くことができる。
0	未学習段階	日本語を話したり聞いたりすることがほとんどできない。

人の選別を行う。判定試験では「話す」「聞く」「読む」「書く」の4技能を測り、「会話クラス対象者」と「読み書きクラス対象者」を認定しているが、本報告では「読む」「書く」レベルの判定に限って報告することとする。

試験開発は日本語能力判定ワーキング・グループ(以下、判定WG)メンバー数名が月2、3回の会議を通して進め、この判定WGが中心となってテストを養成した。現在豊田市内で35名のテストがいる。豊田市内の工場や地域からの要請があれば、このテストとともに判定試験を行い、教室の立ち上げを行っている。

2. 判定試験の開発方針

2007年度に行った地域外国人の日本語能力及び使用実態調査(名古屋大学:2008)の結果、豊田市の工場で働く日系ブラジル人など就労外国人には、在日期間が10年以上と長くなっても日本語の読み書きがほとんどできない人も多いことがわかった。日本語能力試験など従来の日本語能力を判定する試験では、日本語を使った出題のため、質問文が読めない外国人は受験することができなかった。また、これまでの試験のほとんどが教室で学習している外国人学習者を対象としているため、問題の内容は初級テキストに沿ったもので、採点基準も正確さが重視される傾向にある。旧日本語能力試験の「出題基準」にも3、4級の出題基準(シラバス)は「現在、国の内外において広く使用されている数種の初級用日本語教科書を基礎資料とし、日本語教育に関する語彙調査を参考資料作成したものである。」と明記されている。そのため、教室で学んだことがほとんどない外国人にとってはなじまない語や表現なども多い。現在「生活者としての外国人」のた

めの日本語教育事業が文化庁のもとに進められているが、評価システムはまだない。

そこで、以下の基本方針をたて、これに従って試験開発の作業を進めていった。

- 1) 試験項目は、予備調査(2008)に基づき、外国籍住民が日常生活で読んだり書いたりする使用機会が多く、必要性も高いものにする。
- 2) 日本語が読めなければ解答ができないということがないよう、受験者の母語による出題を行う。
- 3) 採点の基準は、正確であることよりも意図が伝わるかどうかに基づく。
- 4) 試験はできるだけ短時間で、受験者に負担が少なく、かつ専門家でなくても採点や判定が行えるものにする。
- 5) 判定にあたっては行動記述によるレベル基準を設定し、その基準に到達しているか否かで判定される。

3. 対象者判定のための「読み・書き」判定試験の開発

3. 1. 判定基準の作成

試験作成に先立ち、2007年度に行った実態調査の結果、およびヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)に基づき、各レベルの判定基準を作成した(表2)。

3. 2. テスト・シラバス、問題の作成

次に各レベルを判定するためのテスト・シラバスと採点基準を作成した。テスト・シラバスは2007年度に行った予備調査の結果に基づき、外国人住民が生活のために実際日本語を使用する機会が多く、必要性も高い項目を取り上げた。また、市内の公共施設や地域の道、店、工場などを調査して普段目に触れることの多

表2 レベル判定基準

レベル	段階	内容	読む	書く
4	拡大段階	より多くの領域で日本語を用いてコミュニケーションができる。	自分で辞書を調べてあまり接する機会のない文や文章が理解できる。	自分で辞書を調べてあまり書いた経験のない文や文章（問い合わせメールなど）が書ける。
3	自立段階	自立して自分の身の周りの社会参加が日本語を用いてできる。	自分で辞書を調べて日常生活で接する機会の多い文や文章（回覧板など）が理解できる。	自分で辞書を調べて日常生活で必要度が高い文や文章（履歴書の志望の動機など）が書ける。
2	要支援段階	周囲の支援に基づいて、自分の身の周りの社会参加が日本語で行える。	外国人にとってもわかりやすく書かれていれば日常生活で接する機会の多い語や文の意味が理解できる。	五十音図や辞書を調べたり、人に助けてもらいながら日常生活で必要度が高い手紙などの短いメッセージが書ける。
1	基礎段階	限られた単語を理解したり、話す・書くことができる。	ひらがな、カタカナ、漢字で書かれた自分の名前、国名など日常生活で必要度が高く、接する機会の多い語であれば理解できる。	名前、国名、住所、所属など使用頻度や必要度の高い語をひらがな・カタカナ・漢字のいずれかで書ける。
0	未学習段階	日本語を話したり聞いたりすることがほとんどできない。		

い文字などをリストした。

「読む」ことに関しては、市役所や銀行などで記入しなければならない書類の文字や街で頻繁に目に触れる表示の意味がわかることが、生活の中では特に求められている。「書く」ことに関しては自分の名前、住所、簡単なメモが書けることが基本的であり、これをどのような問題形式で出題するかを決定した。できるだけ、実際の生活の中で要求される形式を保って試験化するために、「読む」問題と「書く」問題を分けずに、出題することにした。したがって、試験用紙には、名前を書く（書く問題）、性別を選ぶ（読む問題）、年齢を書く（読む問題）、住所を書く（書く問題）、国籍を選ぶ（読む問題）のようになっている。また「読む」問題のうち、街で頻繁に見かける表示（例：バス・出口・危険・月曜定休日など）の意味を4肢選択問題の形式で出題した。「書く」問題には、日常生活で比較的に書くことの多い語や文（例：ゴミ、おめでとう、電話ください）を書いてもらった。この際、問題指示や意味を表す語や文、選択肢はすべて学習者のわかる言語で表示するようにした。したがって、英語版、ポルトガル語版、スペイン語版、中国語（簡体字）版、中国語（繁体字）版、タガログ語版、インドネシア語版、タイ語版、ベトナム語版を作成した。

3. 3. 採点基準の策定

予備実施により解答例を収集し、下記のような採点マニュアルを作成した。マニュアル作成に当たって

は、正確であるか否かではなく、その表記でどの程度伝わるかを調査し、採点基準とした。

〈採点マニュアル例（書く問題）〉

③風邪のため、今日はお休みします（4点満点）

4点：正しい文が書かれている

例：風邪のため、今日はお休みします

風邪をひいたので、今日は休みます

3点：正しくない部分も多少あるが意味は伝わる。

例：わたしはかぜをひいだから、きょうは仕事
できないです

私はかぜをひきました、から今日は会社を
いきません

私はかぜですから、今日は仕事をしません
私は風邪ので、今日会社行かないです

2点：正しくない部分もあるが何とか意味は伝わる。

例：わたしはかぜをひくですから、きょう休ま
す

私はかぜから、きょうしごとじゃない

1点：文が正しくないため、誤解される可能性も
あるが、文脈があれば伝わる。

例：私はかぜから、今日ははたらくないて
しごとはやすみ かぜ

0点：空白または意味の伝達が不可能なもの、明
らかな間違い

3. 4. 実施要項の作成

制限時間は15分とし、テストのための実施要項を作成した。テストは採点マニュアルに沿って採点し、レベルを判定する。読む問題、書く問題ともに以下の基準で判定する。

- 0 レベル：合計得点3点以下
- 1 レベル：合計得点3.5点～9.5点
- 2 レベル以上：合計得点10点以上

4. 実施結果

実施期間・場所：2010年4月から2011年5月。豊田市内工場及び地域集会場16か所。

対象者：工場などに就労する外国人269名。うち194名（72%）がブラジルにルーツをもつ人で、タイ、ペルー、台湾、中国と続く（図1）。

4. 1. テストの項目分析および信頼性

本試験は、とよた日本語学習支援システムが運営する教室の対象者か否かを判定するために行われるもので、実施時間が15分と限られている。そのため、問題数も、読む問題14題、書く問題12題と少ない。表3には読む問題の各項目の得点平均、標準偏差、識別力を、表4には書く問題のそれを示す。

各試験の信頼性（ α 係数）を求めると、表5のように読むテスト、書くテストともに十分な水準に達していると言える。

各問題項目の識別力もすべて0.40以上と高く、問題が測っている「読む」能力、「書く」能力に関して内的な一貫性があるといえよう。また、「書く」問題の採点に当たっては、採点マニュアルに沿ってテストが採点を行い、後日解答用紙をもとに判定WGにおいて複数のメンバーが確認作業を行っているが、採点結

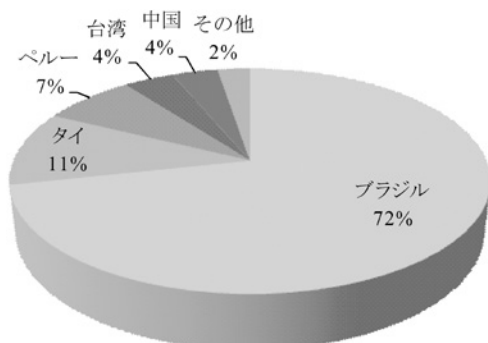


図1 受験者の国籍

果に不一致が認められることはほとんどない。これは採点マニュアルに示されている例示が豊富で、それに沿って採点が行われるため、揺れが生ずることがあまりなく、判断が困難な場合は、そのように記入されるため、判定WGにおいて議論を行い、採点マニュアルを改善していくという作業が繰り返し行われたためである。今回の対象者の前にすでに500名近い受験者に実施し、改善作業が繰り返されてきた。

表3 読む試験の平均・標準偏差・識別力

問題項目	平均	標準偏差	識別力
男女	0.68	0.46	0.69
歳	0.47	0.50	0.68
国籍	0.72	0.45	0.64
くるま	0.81	0.39	0.56
ありがとう	0.82	0.38	0.62
バス	0.83	0.37	0.59
インターネット	0.77	0.42	0.54
出口	0.73	0.44	0.58
危険	0.36	0.80	0.41
10時開店	0.54	0.79	0.76
月曜定休日	0.54	0.79	0.76
食べ物ではありません	0.75	0.85	0.76
電気使用量のお知らせ	0.54	0.79	0.74
至急連絡ください	0.43	0.73	0.71

表4 書く試験の平均・標準偏差・識別力

問題項目	平均	標準偏差	識別力
名前	0.69	0.45	0.64
生年月日	0.42	0.41	0.60
住所	0.33	0.46	0.66
ゴミ	0.63	0.47	0.65
こども	0.62	0.46	0.81
トイレ	0.59	0.48	0.76
アイス	0.35	0.42	0.72
本	0.59	0.76	0.58
今日	0.46	0.48	0.79
おめでとうございます (2点満点)	0.81	0.91	0.85
電話をください (3点満点)	1.13	1.30	0.87
かぜのため休みます (4点満点)	1.14	1.42	0.88

表5 試験の問題数と信頼性

	問題数	信頼性係数 (α)
読むテスト	14	0.88
書くテスト	12	0.89
合計	26	0.91

4. 2. 問題項目別正答率

次に各問題項目について見ていく。図2は読む問題の14項目を正答率の高いものの順に並べたものである。269名の中には中国、台湾の漢字圏の受験生が8%含まれているが、漢字圏の受験者を特に分けずに分析を行った。漢字をすでに多く知っていることは日本で生活・就労していく上で有利であることは予想されるが、それはその人のもっている能力の一部であるという立場で判定を行っている。

図2から、カタカナ、ひらがなで書かれた語の正答率が高く、漢字語彙が難しいこと、自分の国名や性別を正しく選べる人は70%前後であることがわかる。2007年度の予備調査ではカタカナで書かれた自分の名前が読めないと答えた人が10%いた。この試験でも「ブラジル」「ペルー」と書かれた国名が読めない人が多いことがわかる。「男・女」からいずれかを選ぶ項目でも、30%以上が無回答であった。また年齢を聞く（歳）に数字が書かれていれば「歳」の漢字の意味がわかると判断されたが、半数以上の人がやはり無回答であった。「男・女」も（歳）も各種書類で目にして

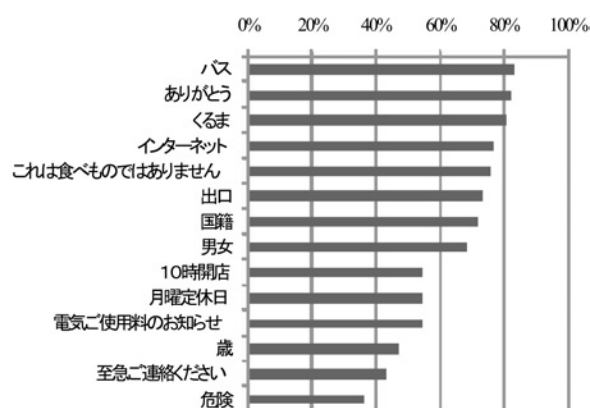


図2 読む問題の正答率 正答率順に並べ替えしたもの

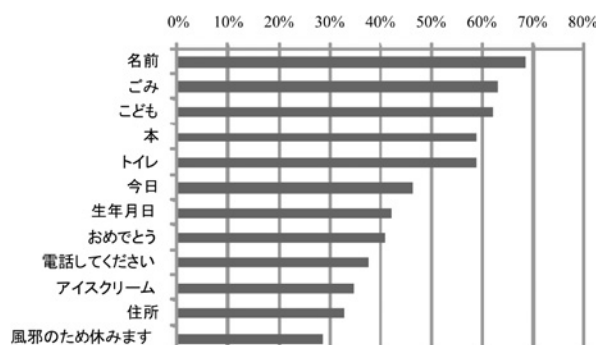


図3 書く問題の正答率 正答率順に並べ替えしたもの

いる頻度は高いが、意味がわからないままに来た人が多いことがわかる。さらに意外なのは、「危険」の文字の意味を母語で正しく選べる人が4肢選択問題で40%に満たないことである。事前調査で「危険」の文字は工場内や駐車場、街路等多くの場所に書かれていた。黄色い地に黒の太いゴシック文字で書かれれば、マークとしては認識できた可能性はあるが、漢字そのものの意味を理解していない人が多いことがわかる。

書く問題12問の正答率は図3の通り、自分の名前が最も高いが、これも70%に届かない。住所がひらがな、カタカナ、漢字いずれかででも書ける人は32%で非常に低い。「ごみ」は「ゴミ」「ごみ」「ゴミ」でも正答として採点している。

4. 3. 判定レベル別正答率

判定基準に従ってレベルが判定されたが、この判定基準が妥当か否かを調べるために、レベル別正答率を見ていく。読む試験のレベル別正答率を表6に示す。

0レベルと判定された人46名はすべての項目の正答率は20%以下であったのに対し、1レベル109名は、「バス」「インターネット」「くるま」が90%以上、「ありがとう」89%、「出口」77%と正答率が高いが、半数の7項目については25%の4肢選択のチャンス・レベル以下であった。それに対し2レベル以上と判定された114名はすべての項目に60%以上の正答率を示している。

表6 レベル別正答率（読む問題）

	0レベル	1レベル	2レベル
判定された人数	46人	109人	114人
男女	15%	58%	99%
歳	7%	24%	85%
国籍	17%	65%	99%
くるま	20%	90%	96%
ありがとう	20%	89%	100%
バス	17%	95%	98%
インターネット	7%	91%	92%
出口	11%	77%	95%
危険	0%	8%	76%
10時開店	0%	10%	73%
月曜定休日	0%	6%	77%
食べ物ではありません	2%	25%	89%
電気使用量のお知らせ	0%	13%	71%
至急連絡ください	0%	6%	60%

表7 レベル別正答率（書く問題）

	0レベル	1レベル	2レベル
判定された人数	92人	61人	116人
名前を書く	29%	77%	95%
生年月日を書く	7%	52%	64%
住所を書く	2%	20%	63%
ゴミ	20%	78%	90%
こども	8%	76%	98%
トイレ	7%	72%	93%
アイスクリーム	1%	33%	63%
本	9%	55%	100%
今日	1%	43%	84%
おめでとうございます	1%	22%	82%
電話をください	0%	15%	79%
かぜのため休みます	0%	4%	64%

(母語表示)

表7に示したように、書く試験については、0レベルでも29%は名前が書けているが、それ以外は20%以下であった。1レベルは名前、「ゴミ」「こども」「トイレ」までは70%以上が書けているが、生年月日の年、月、日を書ける人は52%にとどまる。これは問題欄に「生年月日」の漢字が示されているにも関わらず、「〇〇〇〇年〇月〇日」または「〇〇〇〇ねん〇がつ〇にち」と書くことができないことを示す。「本」は55%の人が「本」「ほん」「ホン」「ほん」など書くことができる。他の項目は一部ができていれば得点を与えているため「読む」に比べ割合は高くなっているが、ほとんどできていない。

4. 4. テストの妥当性の検討

本判定試験の目的は前にも述べたように、外国籍住民が日常生活で読んだり書いたりする使用機会が多く、必要性も高い問題項目を使って、基準に達しているか否かという形で判定を行い、支援対象者とそれ以上の対象外の人を分けることであった。したがって、下記の3点から妥当性の検討を行う。

1. テストとして測っている能力が適切か否か
2. 受験者本人の自己評価と結果は一致しているか
3. 学習の成果から見て適切なレベルを測っているのか

4. 4. 1 テストとして測っている能力について

本試験がカバーしている内容領域は、「外国籍住民の日本語学習における実態等予備調査」(2008年)の「2. 1 日本語使用状況の実態」で報告されている

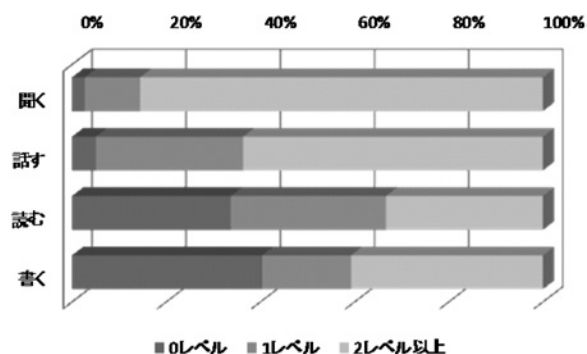


図4 判定結果 (269名)

ように豊田市に在住する外国人にとっていずれも日本語使用頻度の高いもので、同時に調査された「2. 3 外国人の日本語能力についての希望・期待（日本語でできるようになりたいか）」でもニーズの高かったものである。また、独立行政法人国立国語研究所日本語教育基盤情報センターで調査した全国調査でも、同様の結果が得られており、ここで取り上げられた項目は内容的妥当性として十分であると考えられる。

また、本試験を受験した269名の判定結果は図4に示した通りである。「聞く」「話す」で0か1レベルと判定された人は「会話クラス」にまず認定され、「聞く」「話す」が2レベル以上で「読む」「書く」が0, 1レベルと判定された人は「読み書きクラス」の対象者と認定される。判定試験の結果、全体の40%が会話クラス、38%の人が読み書きクラス、23%が対象外と判定された。

判定結果を受けて、工場内や地域集会場などで教室が開催され、2レベル以上になることを目指して10週にわたるコースがスタートする。判定試験を実施せずに希望者を受け入れていた従来の地域の教室では、ひらがな・カタカナを全く読んだり書いたりできない人から、かなり読み書きができる人まで幅広いレベルの人が在籍しており、コース運営上さまざまな問題が生じていた。この判定試験により、支援者にとっては、学習者のレベルが一定範囲に収まり、カリキュラム等の計画が立てやすくなったことに加え、2レベルという周囲が支援的であれば不十分な日本語でもなんとか一人で社会的交渉を日本語で行えるレベルを目標に設定したことにより、現実的で手の届く範囲の目標に向かって学習支援が行えるようになったことが利点としてあげられよう。

以上のことから、対象者を限定する目的にとって、本試験が十分な機能を果たしているということが出来る。

4. 4. 2 受験者本人の自己評価と結果は一致しているか

次に、妥当性の検討の2番目としてCan-do statementsを用いた受験者本人の自己評価と試験結果がどのくらい一致するかを確認した。すべての受験者に対し、試験実施に先立ち30項目のCan-do statementsへの記入をしてもらっているが、その項目の中に「読む」「書く」に関して次のような項目が含まれている。それぞれの項目に関して、「あなたは日本語で次のようなことができますか？ あてはまる数字に○をつけてください。 1：まったくできない 2：あまりできない 3：なんとかできる 4：簡単にできる」の4段階で自己評価を求めるものである。

質 問：読むこと

- 21 カタカナで書かれた自分の名前を見て、自分の名前だということがわかります。
- 22 カタカナで書かれた店の名前や商品名が読めます。
- 23 日常よく見かける「立入禁止」「禁煙」など漢字の意味が理解できます。
- 24 書類などによく書いてある名前、生年月日、国籍などの漢字の意味がわかります。
- 25 日本語で書かれた回覧板や掲示板の内容が、だいたい理解できます。

表8 読むに関する Can-do statements と試験の結果の相関係数

	21	22	23	24	25	読む合計
男女	0.47	0.56	0.47	0.49	0.32	0.61
歳	0.30	0.46	0.57	0.56	0.46	0.60
国籍	0.42	0.53	0.46	0.39	0.32	0.57
くるま	0.33	0.56	0.25	0.31	0.22	0.43
ありがとう	0.34	0.53	0.32	0.33	0.23	0.46
バス	0.41	0.52	0.26	0.26	0.18	0.43
インターネット	0.35	0.55	0.20	0.22	0.19	0.39
出口	0.36	0.42	0.28	0.28	0.19	0.41
危険	0.16	0.23	0.35	0.34	0.25	0.34
10時開店	0.25	0.32	0.54	0.47	0.41	0.51
月曜定休日	0.27	0.36	0.54	0.51	0.39	0.53
食べ物ではありません	0.32	0.47	0.46	0.44	0.34	0.50
電気使用量のお知らせ	0.21	0.29	0.51	0.48	0.34	0.44
至急連絡ください	0.25	0.26	0.55	0.49	0.43	0.50
合計	0.45	0.61	0.65	0.62	0.49	0.72

表9 書くに関する Can-do statements と試験の結果の相関係数

	26	27	28	29	30	書く合計
名前	0.50	0.41	0.32	0.32	0.28	0.45
生年月日	0.41	0.48	0.39	0.44	0.35	0.53
住所	0.36	0.64	0.49	0.40	0.31	0.57
ゴミ	0.44	0.36	0.25	0.26	0.23	0.38
こども	0.48	0.46	0.36	0.40	0.32	0.49
トイレ	0.51	0.42	0.37	0.45	0.33	0.50
アイス	0.41	0.40	0.30	0.42	0.34	0.48
本	0.31	0.31	0.31	0.42	0.37	0.42
今日	0.47	0.55	0.38	0.52	0.40	0.55
おめでとうございます	0.45	0.52	0.34	0.46	0.34	0.52
電話をください	0.43	0.51	0.33	0.43	0.33	0.48
かぜのため休みます	0.44	0.53	0.35	0.53	0.44	0.52
合計	0.56	0.62	0.45	0.57	0.45	0.64

質 問： 書くこと

- 26 自分の名前がカタカナで書けます。
 27 自分の住所をひらがなや漢字で書くことができます。
 28 相手の名刺などを見ながら漢字を使ってあて先を書き写すことができます。
 29 クリスマスカードなどに日本語で短いメッセージを書くことができます。
 30 履歴書を日本語で書くことができます。

この項目と試験の結果の間の相関を求めたところ、表8、9のようになった。「読む」に関しては、「22 カタカナで書かれた店の名前や商品名が読めます」と「バス」「インターネット」のようなカタカナ語の読みとの間には0.52, 0.55の相関が認められた。また、「23 日常よく見かける「立入禁止」「禁煙」など漢字の意味が理解できます」と漢字語「出口」「危険」とは、0.28, 0.35とあまり高くはないが、「10時開店」「月曜定休日」などとは0.5以上の相関が得られている。合計同士では0.72という高い相関があった。

書くに関しては、「26 自分の名前がカタカナで書けます」と実際の名前を書く試験との間には0.50, 「27 自分の住所をひらがなや漢字で書くことができます」では0.64, 「29 クリスマスカードなどに日本語で短いメッセージを書くことができます」と「かぜのため休みます」のような短いメッセージとの間には0.53の相関がみられた。「書く」の合計同士では、0.64の相関が

みられる。

以上から、自己評価と本試験の間には、一定程度の高い相関がみられることが分かる。つまり、自己評価でできると答えた受験者は試験でも得点が高いといえる。ただし、Can-do statements と試験項目得点の間に1対1対応があるわけではない。受験者本人が考える「できる」のレベルと試験の採点基準の「正解」の範囲には違いがあることが考えられる。たとえば、「名前が書ける」を本人は「ロベルト」とファーストネームが書けるので「できる」と答えたとしても、試験の「氏名（母語表示）」ではフルネームで書けた場合のみを1点と採点した。このような違いがあるため、非常に高い相関係数は得られていないものと考ええる。しかしながら、全体として合計同士が0.6から0.7程度の相関がみられたことは、ここで測られている内容が受験者の考える日本語能力とも一致していることが確認できた。

4. 4. 3 学習成果から見て適切なレベルを測っているのか

次に、本試験を実施し、コースを受けた同じ受験者にコース終了時に再度同じ試験を実施し、学習成果を確認した結果から、本試験のレベルが適切であったかどうかを確認する。豊田市内の企業A社で行ったコース前とコース後の比較を表10に示す。コース終了後のテストを受けた学習者のうち「読み書きクラス」では14名中10名が「読む」「書く」のいずれかで伸びが認められ、「読む」では8名が、「書く」では2名が新た

表10 A社における教室開始前後時の判定レベルの比較

14人分

学習者	読む			書く		
	コース前	コース後	進歩	コース前	コース後	進歩
A	2	2	0	1	1	0
B	1	2	+1	1	2	+1
C	1	1	0	1	1	0
D	1	2	+1	2	2	0
E	0	1	+1	0	0	0
F	1	2	+1	2	1	-1
G	1	2	+1	2	2	0
H	1	2	+1	2	2	0
I	1	2	+1	1	1	0
J	1	0	-1	0	1	+1
K	1	2	+1	2	2	0
L	1	1	0	0	2	+2
M	0	0	0	0	0	0
N	1	2	+1	2	2	0

に目標の2レベルに到達したことがわかる。学習者FとJの判定結果が1レベル下がっているが、原因は不明である。

この結果から、本判定試験がコース開始時の対象者の選別に有効であるだけでなく、学習成果を確認し、その手ごたえを感じるためにも適切なレベル設定であったことが確認できる。コース内の学習内容は、本試験内容とは独立しており、試験に出題される内容を学習したわけではない。コース内の達成度はポートフォリオ評価などを用いて行われ、毎回この判定試験を再実施しているわけではない。しかし、コース終了時の確認試験としても十分機能を果たすことが確認できた。

以上、内容領域、自己評価との関連、レベル設定の3つの視点から本試験の妥当性を検討し、十分な妥当性を有していることを確認した。

5. 考察と今後の課題

結論としては、本試験は問題数が少ないにもかかわらず、十分な信頼性と妥当性を備えているといえる。また、マニュアルが整備されているため、テスト間一致度は極めて高く、専門家ではない地域の日本語教育に関わる多くの支援者に利用可能な試験が開発できたといえよう。判定結果は、工場内などの日本語教室でプレイスメント・テストとして活用され、学習対象者にとっても、支援者にとっても有用なものさしであることが確認された。

従来の日本語能力を測る試験は、教室で学習する学習者を対象としていたため、自分の名前が書けない人や、問題文を読んで理解できない人は受験者として想定されてこなかった。ところが、1990年の入国管理法改定以来、日系ブラジル人を中心とする就労外国人の数が急増し、これまであまり表面に出てこなかった生活の中で日本語を習得していく「生活者としての外国人」を対象として日本語能力を測る試験の必要性が出てきた。企業が人を雇う場合や、ハローワーク・派遣会社が仕事を紹介の際に、また本報告のように地域の教室が学習者を受け入れるときなどに、日本語能力のレベルを判定する試験が必要となってきた。教室で学習していることを前提としていないため、従来の試験のように教科書のシラバスを参考にすることはできない。そこで実際の生活場面のどのような場面で日本語

が必要なのかを調べるために、2007年に実態調査（名古屋大学留学生センター：2008）を行い、その結果に基づいてテスト・シラバスの開発を進めた。

判定基準の策定に当たっては、ヨーロッパで進めている言語共通参照枠（CEFR）の基準などを参考にした。しかし、日本語の場合、特に読み書きに関してはヨーロッパ言語間のアルファベットを介しての学習の容易さとは比較にならず、レベル設定に関しては独自の基準を作らざるを得なかった。その際開発の方針でも述べたとおり、必要性和伝わるか否かという基準を重視した。実際、今回対象とした豊田市に住む外国人の多くは、団地から就業場所の工場まで送迎バスで送り迎えされ、工場内では通訳がつき、母語表記のある店で買い物をするなど、日本語を使わないでも必要最小限の生活はできる仕組みの中で、10年、20年と生活してきた人が多い。しかし、一歩家や工場から出れば看板や掲示板には日本語があふれ、通訳など手伝ってくれる人がいなければ役所や銀行で手続きもできない状態で、外国籍住民自身なんとか日本語を学習したいと希望していることが実態調査で明らかになった。判定WGでは、何を読めればいいのか、何が書けなくてはいけなかったか、議論を重ねてきた。その中には、インターネットや携帯電話に日本語の文字を打ち込むというタスクも含まれていた。

現在の試験の中には含まれていないが、今後コンピュータを使った試験も検討していく必要がある。現在、「読み」問題に関してはコンピュータ版の開発を進めてきている。外国籍住民の中には子どものころ親に連れられて日本に来た人や日本生まれの人もおり、母語の言語で書かれていても問題文を十分に読むことができない人もおり、音声で提示してほしいと希望する人もいる。そのためコンピュータに音声提示ボタンをつけ必要に応じて利用できるようにしていきたい。「書き」テストの場合、コンピュータで入力してもらう問題は、入力方法を知らない人に対してどのように対処するかが問題である。また、役所の書類などに要求される手書き文字をどのように判定するかなど困難な点も多いが、できるだけ現実の生活に即したテストにしていきたいと考えている。

今後、外国人を受け入れている企業や商工会議所、ハローワークなどとも一層連携し、本試験の結果を工場などでの処遇や就職の際の参考資料として活用してもらうよう努めていきたい。さらに、日本語学習の成

果が生活の向上につながるような，学習の手ごたえが実感でき，日本語学習を継続していく動機づけを支えるような仕組み作りも工夫していきたいと考えている。

文献

名古屋大学留学生センター(2008)『外国人住民の日本語学習における実態等予備調査委託報告書』平成19年度豊田市委託業務，名古屋大学留学生センター

村上京子(2009)「外国人就労者のための日本 'Can Do' statements の開発 ―パフォーマンス・テストによる妥当性の検討」『言語教育評価研究』第1号，pp. 21-34. 言語教育評価研究所

村上京子(2009) 日本語学習支援システム構築に向けた能力判定の開発『ヨーロッパ日本語教育』13, pp. 81-88.

国立国語研究所(2010)「『生活のための日本語』全国調査について」

ヨーロッパ日本語教師会(2005)『ヨーロッパにおける日本語教育と Common European Framework of Reference for Languages』国際交流基金

豊田市ホームページ：http://www.city.toyota.aichi.jp/jinko_data/ (2012年3月アクセス)

とよた日本語学習支援システムホームページ：<http://www.toyota-j.com/> (2012年3月アクセス)